

資料3 『平成17年度入学生 総合学習記録集』より一部抜粋

順番	タイトル	クラス	発表者	ゼミ名
発表1	脳死と尊厳死 - 死の尊厳を考える -	7組 b		いのちゼミ
発表2	日本を支える経営者たち	6組 a		経済ゼミ
発表3	クリーンエネルギー使用による人間への影響	2組 a		環境ゼミ
発表4	野生動物と人の共存のために何が出来るか。	1組 a		環境ゼミ
発表5	犯罪を犯した少年と、その被害者の人権	8組 b		人権ゼミ
発表6	朝食で頭が良くなる？	4組 b		フードゼミ
発表7	現代医療を考える - 終末期医療を見つめて -	2組 b		いのちゼミ
発表8	人はなぜギャンブルをするのか - ギャンブルに狂れ狂れ人々 -	3組 a		経済ゼミ
発表9	自分自身の体を知る - うんちでわかる健康 -	1組 b		メディカルゼミ
発表10	子どものあそび環境の変化 - 子どもはあそびの天才か -	7組 a		コミュニケーションゼミ
発表11	日本が戦後60年をむかえて - 過去を知り、今を見つめ、未来を考える -	8組 a		平和ゼミ
発表12	現代食生活の現況	6組 b		フードゼミ
発表13	色のありかたと現在 - 札幌の景観は変わるか？	4組 b		コミュニケーションゼミ
発表14	社会心理学は ~ 暮らしの中の心理学 ~	5組 b		コミュニケーションゼミ
発表15	脱 地球温暖化に向けて - 未来の地球を見据えて -	5組 a		環境ゼミ
発表16	クローンについて - 将来クローン技術はどうなるか -	3組 b		メディカルゼミ

8:35	8:45	9:00	10:15	10:40	12:25	13:05	14:15	14:30	14:45
S	移動		移動						S
H	整列	講演	移動						H
R			個人課題研究発表(前半)		昼食 休憩	個人課題研究 発表(後半)	講評 表彰	移動	R

「野生動物とヒトの共存のために何が出来るか。」
環境A

1. はじめに
私がこの課題を設定した動機は、テーマ設定の時期に環境に関わる仕事に興味を持っていったことにあります。将来、生態系を壊さずに人間が生活することを強く望んでいるため、それに関する事項を新聞記事から検索しました。そこで、一昨年大蔵に駆除されたツキノワグマについての記事を読み進めるうちに、野生動物の駆除は本当に必要なのか、駆除以外の方法は無いのか等の疑問が思い浮かび、テーマを決定しました。

2. 有害駆除とは
まず、有害駆除について考えていきたいと思います。有害駆除とは、「人間に害を与える、もしくは与える可能性がある動物を人間に対する被害を防ぐために殺すこと」です。例えばクマなら、人間を襲った・樹木(スギ・ヒノキ・モミ・カラマツ等)の樹皮を食す・人里に下りてきた等の理由から駆除され、シカであれば、増えすぎて木の葉や草を食べることの防止・電線に衝突する事故の被害軽減等のために駆除されます。

日本には600種を超える鳥獣が生息しており、そのうちシカ・イノシシ・ノウサギ・クマ等18種類の鳥獣、キジ・ヤマドリ・スズメ等9種類の鳥類が鳥獣保護法という法律により野鳥鳥獣となっています。この野鳥鳥獣は生息状況や森林への被害の程度、資源としての有効性をもとに決められます。その他、研究や人間生活に被害を与える場合には特別に許可をうけて捕獲することが可能です。

しかし、農作物などを食べる鳥獣は、被害をうけた人が申請すれば何の審査もなく、すぐ有害鳥獣駆除の許可が下りる仕組みとなっています。しかも、有害駆除は原則として1年中・いつ・どんな場所でも許可されます。子供の通学路や農地で駆除が行われることなどは日常生活です。危険を知らせるために、駆除の前には地域住民に周知しなければならないのですが、実際はそれさえ行われていない地域も多いといえます。そのため、山菜採りや山歩きをしにきた人に襲って死傷するという事故は増え、毎年100人以上の方が死傷しています。つまり、有害駆除は人に対する問題点も抱えているのです。

3. クマの危険性
有害駆除される動物は本当に危険なのでしょうか。ここでは、クマに焦点を置いて考えていきたいと思います。

クマの駆除数は40年前からほとんど変わりませんが、昨年駆除されたクマは568頭で、うち32頭が世界自然遺産の知床で殺されました。現在、北海道の約95パーセントにヒグマは生活しており、北海道とクマには密接な関わりがあります。昔から、クマというのは緊張感ある自然を創出している自然の元締め動物であり、人を無差別に襲うことはしません。道内で1年間に人を襲うクマの存在率は、2000分の1とも言われています。それなのに、人が恐怖心を持ち、危害を加えられるかもしれない、と子グマでさえ餌を食べているところを殺されたりもします。勿論、人に危害があつてからでは遅いかもしれませんが、出てくれば殺せばいいとも思いません。ここで、クマが人家付近にやってくるようになった理由を考えてみましょう。第一に、餌となるドングリの量等の収穫の量が足りなくなっていることですが、さらに、山に集めた人達が無責任に捨てて行ったゴミから人の食べ物の味を覚えたしまったこと、私達人間がクマの生活領域で生きてきた場所をどんどん拡大して移住してきたことがあつた場所があるということも構に加えて、自分達の利害だけを優先しているのです。

4. 駆除の問題
また驚くべきことに、1年間に駆除する鳥獣の種類と数は前もって決められており、ハンターは年々駆除することが可能となっています。そのうえ、駆除は税金で行われる事業であるのに、駆除が本当に効果をあげているかどうかの事後の評価制度はありません。さらにここで問題なのは、野生鳥獣からの被害を最も受ける農家に對しては、被害補償の制度はほとんどないということです。補償がされないため、被害を受ける側の人々はただ殺せという要求しか出ません。被害防除のために予算が使われれば、これほど野生動物を殺さずに済むのではないかと思います。

このような事実をもってしても、私達はこのまま有害駆除を続けていく必要があるのでしょうか。1年間に有害駆除のために捕獲される鳥獣は、鳥類

「ゼミエントリースシート」を作成。自分の研究テーマやテーマ設定の理由、そして現時点での研究計画。これらについて所定の書式(資料2)にレポートをまとめて提出する。これをもとにして興味・関心の近い生徒が前述の8テーマに即してまとめられ、2年次以降の所属ゼミが決定される。

取り組みを通して学校全体の指導力を底上げ

年によってスケジュールや内容は異なるが、2年次の「Sunrise Time」では、各メンバーがエントリースシートに書いた研究テーマを相互に発表するところから始まる。それをもとに多様な興味・関心を刷り合わせ、ゼミとしてのテーマを設定。まずはそのテーマに即した読書や調べ学習を繰り返して、書籍紹介のレポート執筆などを行う。

また、秋にゼミ研修旅行も企画され、ゼミごとに公共の施設や民間企業などへの取材・見学を実施。そのための事前調べ学習の成果とあわせ、メンバー共同でレポートをまとめる。

こうしたゼミ活動の最終目標となるのは個人課題研究だ(資料3)。川瀬先生によれば、ここで重要なのは自分の研究成果を発表し、批評し合うというプロセスである。例えば研究の途中では各自のテーマ内容の相互批評、論文執筆に向けた情報収集の成果についての中間発表などの機会が設けられる。もちろん最終的にまとめた研究結果は、ゼミの中で発表することになる。

「さらに、ゼミ内発表で最も高い評価を得た者はゼミ代表として年度末に全校規模で行われる『Sunrise Time発表会』のステージに立って発表します。発表に向けては、パワーポイントを使ったディスプレイの手法なども積極的に学んでもらいます」

興味・関心の発掘、読書をはじめとする情報収集、一定の書式に即したレポートや論文の執筆、発表と相互批評……。一連の活動を

場合によっては『親御さんと話してごらん』と促すこともありです」

問いかけが繰り返されれば、将来展望の曖昧さに対する自覚も生まれる。話す機会が乏しかった親の思いを知れば、それは自分の将来イメージに輪郭を与える補助線となるかもしれない。

「たまにまに揺さぶってやることで、いろいろな大人と話す機会も増えます。その蓄積が「Sunrise Time」の試みとミックスされ、進路意識を深めていくのではないでしょう」

自分の手で情報を収集すること、多様な大人と対話すること。これらを通じて生徒は、選択の「主体」として成長することを促されるわけだ。その成果を踏まえて、1年生は10月に2年次選択科目の受講登録を行うことになる。

さて、9月以降、1年生は「Sunrise Time」の新しいテーマに取り組み。2、3年生の「Sunrise Time」の中心的活動であるゼミ活動に向けての準備が開始されるのだ。

さて、9月以降、1年生は「Sunrise Time」の新しいテーマに取り組み。2、3年生の「Sunrise Time」の中心的活動であるゼミ活動に向けての準備が開始されるのだ。

さて、9月以降、1年生は「Sunrise Time」の新しいテーマに取り組み。2、3年生の「Sunrise Time」の中心的活動であるゼミ活動に向けての準備が開始されるのだ。

この取り組みを紹介するには、同校独自のゼミについての説明が必要だろう。

1年次、生徒たちは40人ずつ8クラスに編成される。ホームルームのほか1年生の授業の大半を占める必修科目や「Sunrise Time」での学習は、一般の高校と同じようにこのクラス単位で行われる。ところが2年次以降卒業まで、生徒たちは20人ずつのゼミという学習集団に所属することになる。

ゼミは、学問的興味・関心の近い生徒が集う研究集団で、「Sunrise Time」の中で研究活動を行う。現代社会を考えるための8つのテーマ(資料2)があらかじめ設定され、1テーマにつき基本的には2つ、合計16のゼミが開設される。

生徒はそのどこかに所属するのだ。川瀬先生によれば、ゼミは自由選択の単位制ゆえにばらばらになりがちな個人を束ねる役割も果たしている。

「2年次以降は朝夕のホームルームも、異なるゼミ2つを組み合わせて編成します。生徒は毎日のホームルームで「Sunrise Time」で必

「ゼミ」の構成

「Gステージ」「Pステージ」では、「LIFE」の8つのサブテーマ(拠点)を持つ「ゼミ」を構成します。

「コミュニケーション」(地域社会から考える)	「経済ゼミ」(経済・産業・先端技術から考える)
「人権ゼミ」(人権・福祉から考える)	「フード・ゼミ」(食・栄養から考える)
「メディカル・ゼミ」(医療・保健・衛生から考える)	「いのちゼミ」(生・死から考える)
「環境ゼミ」(環境・自然から考える)	「平和ゼミ」(戦争・平和から考える)

※欄は記入しないこと。

ゼミ課題研究エントリースシート

出席番号	氏名
ゼミ課題研究テーマ	
テーマを構成するメインキーワード	
キーワード	意味
テーマ設定の理由	
研究計画(おおよそな章立て、研究方法(例:実験)など)	
LIFEとの関連性	

社会的現象に明確な学問的な興味・関心を抱いているわけではない。そこで1年次後半「Sunrise Time」の「ゼミエントリース研究」は、社会的現象に興味のとっかかりを見つけるところから始まる。

現代の社会問題をまとめた副読本を読み、「環境」「国際化」などのジャンルごとにキーワードを見つめる。次いでそのキーワードの中で興味を持った分野について、読書やメディア情報の収集・要約。こうしてキーワードや情報が集積されていくことで、自分の興味・関心が輪郭を持ち始める。

「並行して『大学で学ぶ』学問研究会」という多くの専門家をお

「ゼミ」の仲間と顔をあわせる。大抵は、生徒がどのゼミに所属するのかがどうやって決まるのか。そのベースになるのも「個人」だと川瀬先生は言う。

「ゼミのテーマはLIFEをメインテーマとして現代社会を考える8つの切り口となっています。そのどこに自分は接点を見出せるか。それを各生徒個人の興味・関心に照らして徹底的に考えさせます」

だが、高校に入学して日の浅い生徒の多くは、あらかじめ特定の

通じて生徒は、あらゆる学問分野に共通する知的活動の基本を体験的に学ぶわけである。

全体の進行計画に沿ってこれらの作業を促し、場面ごとに助言を加えるのがゼミ担任の仕事だ。ただしゼミ担任は、必ずしも教科の専門に応じたゼミを担当しているわけではない。したがって、生徒たちの研究を内容面ではサポートしきれない場合もあり得る。

だが、それでも指導をお願いすることは十分可能だと、同校総務部長・成田英行先生は言う。

「専門外の先生でも、生徒の書いたレポートや文章を読んで理由付けの甘さを指摘していただいたり、指定の書式に即して書いているかどうかをチェックしていただいたりすることはできます。そういう形で構わないので、担当に関わりなくゼミ担任になっていただくことにしています」

生徒が求める内容的な指導に応じきれない場合は、その分野に詳しい教員を生徒が訪ねて指導を仰ぐ。こうして指導をゼミ担任一人が抱え込まない条件を整え、同校では多くの教員がゼミ指導にあたることになっている。

このような一連のゼミ活動の意義は、自分の興味・関心を見つけ、それを学問的に探究する喜びを実感するところにある。自分と学問との接点を見つけ、探究の喜びを糧にして学ぶ。そのような感性は、大学人として重要な資質だ。また、その喜びや楽しさを高校在学中に先取りして感じておくことは、受験という現実的な課題へのモチベーションにもなる。

だが、個人課題研究に至るまでの活動の波及効果はこれだけにとどまらない。そのことを3年生になって行われる個別小論文指導を切り口にして見てみよう。

多くの高校の小論文指導は、生徒と教員、それぞれに起因する困難を抱えている。生徒側の事情とは、知識不足や社会問題への無関心、文章執筆経験の乏しさである。そこで早期から全校的な指導を行おうとすると、今度は全体の協力が得にくいという教員側の問題が浮上する。専門外のテーマは指導しづらい。国語的な文章指導のやり方がわからない。これらが理由となって、十分な協力体制を作れない学校は今も少なくない。

それと照らしたとき、〈Sunrise

Time〉での研究活動は生徒と教員の両方にとって指導の素地を作り出していることがわかる。

「まったく初めて」という生徒がいけないのが、大きな特徴だと川瀬先生は言う。

「生徒全員がゼミ活動を通じて読書から文章執筆、発表までのプロセスをくぐっています。だから3年生の〈Sunrise Time〉ではその延長で小論文研究に移行する生徒も多く、彼らはこちらが強いまでもなく読書・執筆に向かいます。すでにプラットフォームができていくわけです」

また、ほとんどの教員が〈Sunrise Time〉の指導に携わる同校では、教科横断的な小論文指導への教員側の抵抗感が小さい。1人で指導しきれなければ、他の教員の協力を求める。このことは既にゼミ指導で実践済みだ。そのため生徒の方も、見てもらううえでの不安を感じないはずだと成田先生は語った。

「〈Sunrise Time〉の指導に何らかの形で全員が携わるシステムが、受験対策での指導という面での学校全体の力を底上げすることにもつながっているのを感じます」

ある生徒の小論文は指導を割り振られた教員と社会科の教員、別の生徒の場合は担当教員と家庭科の教員というように、生徒ごとに指導のユニットは組み替えられる。これは生徒個人の選択に応じて履修科目が選択されるのと根本は同じ。そのフレキシブルな指導の素地を、受験対策とは異なる発想から生まれた〈Sunrise Time〉での活動が生み出しているのである。

近年の入試では小論文以外にも面接やグループ討論など、生徒の社会的関心のあり方や学ぶ者としての資質が問われる場面が増えた。まさにゼミで成長を促してきた部分で、入試で問われるわけだ。

だから、と川瀬先生は言う。「私たちはいい意味で生徒たちを『地』のまままで送り出すことができる」

明確な進路意識を持った主体の形成、自分と学問との接点を早期から実感させる働きかけ。受験対策のはるか手前の部分を耕すこれらの取り組みが、じつは最大の受験対策として機能している。それが同校の教育システムの大きな特徴と言えるかもしれない。

(取材・文 寺川 潔)